

新世界へ

(エレミヤ書 10 章 6-10 節 a、ルカによる福音書 24 章 44-53 節)

2021 年 5 月 16 日

日本基督教団

仙川教会主日礼拝

大串肇牧師

イエスは十字架において処刑されました。しかし 3 日目後に復活しました。更に 40 日たったとき、キリストは昇天されました。この事実を伝えるのは唯一ルカによる福音書です。福音書の物語はここでピリオドを打つのですが、終わりではありませんでした。イエスはもはや弟子たちとは一緒にはいませんが、やがてイエスは彼らに聖霊を送り、教会を生み出しました。そうして弟子たちや人々を支え続けたのです。キリストの昇天こそ、新しい歴史のスタートです。新世界が始まったのです。

イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」 (ルカ 24:44)

ルカ福音書の記した短い言葉の中にイエスのご生涯の意義が明白に語られています。「**律法**」「**預言の書**」「**詩編**」とは聖書（旧約聖書）のことです。イエスの出来事はすべて聖書に記されていたことである。これがイエスのご生涯の意義です。イエスを信じる者は皆この聖書を知り、理解することが出来るのです。聖書に記されていることは単なる上辺だけの言葉、人間が生み出した理想や思想ではありません。というのは、イエスの十字架と復活によって、聖書の記した神の御意志やご計画が全て実現されたからです。

他方、弟子たちは恐れていました。実際、復活したイエスを見ても信じられないうで、幽霊だと思い込んでいたというのです。しかし、イエスは「**聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて**」(45 節) 下さったのです。彼らにとってそれは決して目新しい言葉ではありませんでした。イエスが「**苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する**」ことは何度もイエスからも聞いていました。しかし今やその言葉通りにイエスは復活したのです。それは人々が悔い改め救われるためでした。

「罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」(47節)。

あの有名な放蕩息子が父親に罪赦され悔い改めた譬え話を思い起こします。しかし今、それは譬え話ではなく、実際に起こったのです。イエスは十字架にお付きなりご自分の命を捨てられました。それはわたしたちの罪をご自身が担ってわたしたちの罪を赦すためだったのです。

イエスを裏切り、逃げ去った弟子たちはイエスを恐れていました。しかし聖書に心を開かれると、自分たちがイエスによって罪赦されたことを知ったのです。聖書に心を開いた、その瞬間、彼らは新しい生き方に解放されたのです。それはまさに神の愛を知ったときでした。その神の愛を彼らは今やイエス「**の名によってあらゆる国の人々に**」宣べ伝える、言わばキリストの「証人」となるということが弟子たちに約束されたのです(48節)。このことが実際に実現するのが次週の日曜日の礼拝ですが、「聖霊降臨祭」(ペンテコステ)の日なのです。

こうしてキリストの出来事は福音書の最後で終わりではありませんでした。弟子たちが全世界に福音を宣教していく、教会の歴史に繋がっているのです。そのスタートにふさわしいような、素晴らしい光景を弟子たちは見るようになります。

イエスは、「**彼らをベタニアの辺りまで連れて行き**」あたかも大祭司のするように「**手を上げて祝福され**」ました。「**そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられ**」ました(50-51節)。こうして弟子たちは「**イエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた**」(52~53節)のです。

これはあたかもエルサレム神殿で人々が賛美し、その礼拝で大祭司が祝祷を捧げている。まさに礼拝です。神の愛と赦しに生きる人々が交わり、礼拝を捧げる新しい世界が開始したのです。それは今までのユダヤの礼拝とは異なっています。復活し昇天されたキリストを主として礼拝することです。それがキリストの昇天直後から始まったのです。

大祭司キリストこそ、わたしたちの主です。このお方がわたしたちの拝むべき礼拝の主となられたのです。ですから、この礼拝の中で主の御言葉が聖書を通して語られます。わたしたちはその主の御声に心の耳を開けばいいのです。それだけでわたしたちは神に受け入れられるのです。神はわたしたちの悔いた心を受け入れ、キリストの名によってわたしたちの罪を赦し、わたしたちを受け入れてくださるのです。このキリストと共に、新しい世界、信仰の道に御一緒に踏み出してまいりましょう。お祈りいたします。